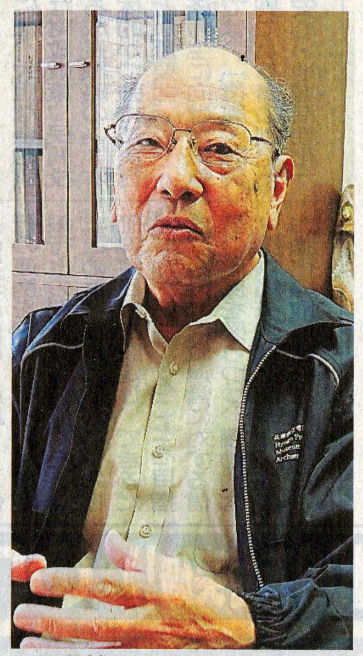
ニッポン 人・脈・記
jinmyaku@asahi.com

邪馬台国を求めて 8

掘ってつないで40年


石野博信さん

邪馬台国近畿説の有力な候補地が、奈良県桜井市にある集落跡、纒向遺跡だ。

3世紀ごろに大小様々な前方後円墳が築かれ、最大級の箸墓古墳（全長280メートル）は卑弥呼の墓との伝承もある。

兵庫県立考古博物館長の石野博信（79）は1972年、纒向の発掘を任された。奈良県立橿原考古学研究所に入って2年目だった。

石野が掘り進むと、幅5メートルの真っすぐな溝が数百メートル以上にわたって出土した。箸墓に向かって延びる運河のようだった。大量の土器が埋まった土の層もあった。しかし、その下にはなぜか生活の痕跡がまったく見られない。

「まっさらな土地に新しい町を造る。今ならば、都市基盤整備事業みたいなものか」。そう推測してみたが、確信が持てない。

「5年も掘ったが、『何じゃ、この遺跡は？』という思いがずっと消えなかった」

石野は思った。

「住居の跡が一つもみつからない。人家のない町なんてあるだろうか？」

石野からこの遺跡の調査を引き継いだ寺沢薫（62）はある日、1メートル四方の四角い試掘溝を掘ってみた。

断面を観察すると、住居跡らしいくぼみがいくつも重なっているのに気がついた。

どれも浅く、複雑に絡み合っているように見える。どうやら建物を建てた後に、ほどなく次を新築することが繰り返されていたらしい。

発掘調査は、地面を水平に掘る。ある深さに達したら、その表面の土の色や質の違いを見分ける。そこを集中的に掘り下げれば建物などの跡が浮かんでくる。だが纒向の場合は痕跡が薄すぎて、なかなか住居と判断できなかった。

寺沢は、県立橿原考古学研究所で30年近く、纒向遺跡を調べてきた。現在は桜井市纒向学研究センターの所長を務める、生き字引的存在だ。

「この遺跡にたくさんの家があったことは間違いない」と寺沢は言う。

ただ同時に「人の目で痕跡を見分ける現在の発掘技術で、それを掘り出すのはほとんど不可能」と音を上げる。

とはいえそれは、庶民の宅地のこと。「都市」を象徴する大型の建物が近年ようやく姿を現し始めた。

寺沢の後を継ぐ、桜井市教委調査研究係長の橋本輝彦（43）は2009年、南北19・2メートル、東西12・4メートルの建物跡を掘りあてた。

3世紀前半の中では国内最大。同時代に生きていた邪馬台国の女王、卑弥呼の神殿ないしは宮殿かと注目された。

橋本は奈良大1年生の時、寺沢の発掘現場でアルバイトを始めた。家業の骨董商を継ぐつもりだったから、考古学の道に進む気はなかった。

でも、纒向の調査を手伝ううちに「ここを掘りたい」と思うようになった。弥生時代から古墳時代への移り変わりはどこから始まるのか。その謎解きがおもしろくなった。

「寺沢さんは東京出身。うまく発掘できないと関東弁で怒られる。関西人の僕には怖くて、『辞める』なんてよう言わんかった」と橋本は笑う。

09年に掘った大型建物跡の敷地は、東西150メートル、南北100メートルの範囲に土を数十センチ盛り上げて整地してあった。

「土器のかけらもごみ捨て穴もない。清浄な空間として整えられたのではないか」

丁寧な観察は寺沢に厳しく仕込まれたものだ。

実は、この建物の発見は偶然ではない。寺沢が周辺を何度か発掘し、やや小ぶりな建物跡数棟分が整然と並ぶのを確認している。「その先に何かある」。橋本はそうにらんでいたのだ。

寺沢は「このあたりに卑弥呼がいたと考えるべきだろう」と言い切った。

一方、最初にこの遺跡を手掛けた石野は慎重だ。

「卑弥呼が中国からもらった金印を押した封泥、つまり公文書の封をした粘土が出土するかどうか。見つかれば中枢の役所があったことになり、決まりかもしれないが」

決定打を求め、今年も纒向遺跡の発掘は続いている。

（小滝ちひろ）

寺沢薫さん

橋本輝彦さん